

平成 25 年度第 11 回小学校ゼミナール記録

2014 年 3 月 6 日(木)

於：広島大学附属小学校

参加者：福田博人(司会), 他 11 名

1. 協議事項

研究協議会で実施された授業についての反省

2. 協議内容

第 65 回初等教育全国協議会において実施された前田教諭の授業についての反省を行った。授業では、好きなスポーツをクラスの人に調べた結果が表として与えられ、その表に合うグラフがどれか問われた。この教材の意図は、棒グラフを読む活動を通して、目盛りの考え（1 目盛り分が何人を表しているのかというもの、縦軸のはじまりの目盛りの数値に関するもの等）を理解させることであった。この授業は、児童からの主体的な発表や児童間の活発な議論を踏まえながら進行され、オープンな結論を指向した授業が展開された。

反省点として、授業者からは、基本的には思い描いていた通りの進行になり、目盛りに関する理解も深まったといえるが、1 時間の内容をもっとスマートにしたかった点が述べられた。また、予想通りの授業になった根拠として、「数えなくてもよい」や「差や順番が分かりにくい」といった表のメリット・デメリットや、グラフのメリット・デメリットを子どもが本授業の前の段階できちんと理解させられていたことが挙げられた。

反省点を議論する中で、授業当日の協議会において、参観者から、表からグラフを作成する際の目的を明確にすべきであるという意見が出された点が話題に上がった。この意見にはグラフの良し悪しを明瞭にする意図が込められていることが考えられる。それに対して授業者の意図は、このグラフは良くてあのグラフは悪いというように、白黒をはっきりさせることではなく、このグラフとあのグラフは全く異なる形をしているけれども、目盛りに着目して考えると、両方のグラフは同じことを表しているということを探究し、見つけ出させることであった。この点から、グラフの良し悪しを明確にするのか否かが、数学的な見方と統計的な見方の差異の 1 つかもしれないという議論へと発展した。絶対的真理を発見しようとする数学的な見方と、価値観なども考慮して判断しようとする統計的な見方では大きく考え方が異なり、統計をどのように数学教育で扱うのか、という今日的な課題も挙げられつつ、反省会は終結を迎えた。

(文責：福田 博人)